会長の 独り言

Vol.7

ノルウェーの知恵

日本学術会議会長 金澤一郎

この9月4日から10日まで、ノルウェーのオスロに滞在してきました。それは、カヴリ賞授賞式に先立って行われた科学フォーラムにパネリストとして招かれたためですが、多くの点でノルウェーという国に学ばせてもらいました。まずこの賞についてですが、ノルウェー人でありアメリカで成功した大富豪のフレッド・カヴリ（Fred Kavli）氏が、私財を投じて設立したカヴリ財団が、隣国のノーベル賞に匹敵するような賞を2年に一度、宇宙物理学、ナノサイエンス、神経科学の三領域の優れた研究者に授けるというものです。日本の国際賞や京都賞のようなものと言って良いでしょう。国王も出席される授賞式は厳かなものでした。今回が2回目の授賞式でしたが、2年前の第1回目には、ナノサイエンス領域で、我が日本学術会議の連携会員でもある飯島澄男先生が、カーボンナノチューブ発見のご業績で受賞されておりますので、この賞のことをご存知の方も多いでしょう。

さて、ノルウェーという国についてです。私は、ノルウェーについては、北欧の王国であり、ナンセン、イプセン、グリーク、ムンクを生んだ国であり、フィヨルドの国であり、ノーベル平和賞を選考する国であり、EUには属さず、「えらく背の高い人々の国」という程度の知識しかありませんでした。ところが、離任間近の山口大使やその他現地の多くの人たちから様々な情報を聞くにつれて、ノルウェーという国の「底力」と「賢明さ」がだんだん分かってきて、愕然とすると共に、これまでの私の不明を恥じたのでした。例えば、皆さん方は、ノルウェーの一人当たりのGDPが日本のその約2倍であることをご

存知でしたでしょうか？それを聞いて私は本当に驚きました。しかも、それは1960年代末にそれまでの長い地道な調査に基づく確信のある国策によって行ってきたオフ・ショア油田の開発に成功したことに端を発するのだそうです。それ以後、しばらくはさすがに国として「赤字」だったそうですが、1970年代には安定したいわゆる産油国となり、今や中東よりも一日産油量は多いのだそうです。

こうしてノルウェーには1980年代から、経済的に大きな「富」がもたらされました。実は問題はこれから先なのです。この国は、面積こそほとんど日本と同じくらいですが、人口は何と500万人にも満たず、その人口も首都オスロに50万人が集中しているという国です。一般的な税金も高く、消費税は北欧三国とともに25%と高率です。また、町を歩いても決して「華美」ではありません。むしろ質素と言って良いでしょう。これが世界有数のGDPを誇る国なのだろうか、と首を傾げたくになります。けれども、ノルウェーの人たちは、自信に溢れ、自国を誇りに思っています。多分それは、オフ・ショア油田の寿命が短い事を見越した政府が1980年代に、「富」を備蓄しようと国民に呼びかけ、国民もそれを支持しているからだとのこと。これには驚きを越えて本当に頭が下がりました。しかも、日本を評価して、その「富」の一部で日本の国債を5%分も買ってくれていると聞いて、下がった頭を上げることができませんでした。

ご意見はこちらまで

✉ ichiro.kanazawa@cao.go.jp